

大磯（下町）の左義長 — (3) —

日守高造

火がようやく盛んになる。世話人たちが裸坊の宿へかり出しにまわる。宿へは、ヤンナゴッコの艦綱取りが入っている宿を筆頭に、分に応じた酒・肴（新婚さんなどから奉納される）が配られてある。寒さしのぎの酒・肴でほどよい気分の若者たちが、いっせいに裸になって飛び出してくる。

9つのオンベが燃え盛り、あたりが明るくなった。漁師の長老たちの話では、この火が空を赤く染める様は、遠く大島や三浦、伊豆半島から見えたという。炎がオンベに届きはじめる。四方に張られたオンベ綱がはずされ世話人たちの合図で恵方の方位へ穂先を倒しにかかる。漁師たちはこれが恵方に倒れるときは豊漁であると信じているから、間違ったら大変だ。一致協力して上手に倒れてきた。火花が飛び散り、火勢は一挙にあがった。どよめきが起こり、取りまく輪がひろがる。火へ、だんご焼きの長竿（約3メートルくらいの竿の先に針金の輪っぱをくくりつけ、その針金にだんごがさしてある。焼けただんごを食べると風邪をひかないとか。）が一斉に差し出される。時分はよく、かり出された裸坊たちが、伊勢音頭を唄いながら肩を組んで宿ごとに火のまわりに集まって来る。

世話人の合図の提灯が振られ、ヤンナゴッ

コが始まった。厄病神がおし込まれている櫂は海へ持ちこまれ、裸坊が泳いで沖へ沖へと持って行く。海からけむりが立ち昇っていかにも寒そうだが、彼等は寒さを弾き飛ばすようには大声で「よいさ、よいさ」と沖へ向かって行く。1人、2人とお仮宮へまたがって唄い出すと、つられて一頻り伊勢音頭で威勢づけをする。

頃合を見はからって、世話人たちが引きあげ提灯を振ると、声自慢が高だかと松前木遣りを唄うと、だんご焼きを見物人も一緒になって綱をとり、「よいさ、よいさ」と陸への引き揚げが始まる。裸坊たちは櫂にまたがり気分よさそうに歌っている。引き揚げたお仮宮は、渚で踏んだり蹴ったりして、めちゃくちゃにこわしてしまい、さらに火のまわりをひとまわりしてあぶってしまう。そこで厄病神はこれはまいったと逃げ出してしまうそう。

再び合図の提灯が振られると、太綱を引っ張ってご利益にあずかろうという信心ごころもあってか、それともまつりに参加する楽しさからか。男も女も子供も先を争って綱引きに参加する。裸坊は櫂に、艦綱もしっかり握られた。

ヤンナゴッコは、海浜をあがって、町内を一周し道祖神社へ納めるわけであるが、道筋では提灯を持ったり、軒下に吊したりして出迎えている。コースのところどころの電柱には、艦綱を縛るための予め定めた印が付してある。最近では印のための行灯が灯されている。交通整理にお巡りさんや指導員が笛を鳴らしてなかなか忙しそうだ。

道祖神社まで、木遣りや音頭で賑やかに、しかし中には寒くてふるえている裸坊もいる。威勢のよいのが肩を貸して組み、2人で踊つ



たりもしながらはげましている。なにしろ寒夜の中を1時間余り引いて行くのだから、裸坊は寒行をしているようなものだが、これで風邪をひいたり、けがをしたなどの話は聞いたことがない。神のご加護のしからしむるところということかも知れない。

綱は浜をあがって町内に入って来る。見物人も浜から道筋へ集まっている。綱が電柱に縛られる。歌の方もまた賑やかになった。歌っては引かれ、引かれながら歌う。やがて神社の境内で打ち鳴らす迎え太鼓が聞こえてくる。



宮入りは鳥居の前から真直ぐ国道1号線に接している通称大横町と呼んでいる道路の、艤綱は国道まで持って行く。そこから約100メートルばかりを松前木遣りで一挙に宮へ駆け込むのだから、引く方も引かれる方も気を合わせないと無事ではない。しかしそこは毎年のことで、お互いうまくコントロールできるもので、見た目にはスピードも手頃、威勢もよくて華やかな宮入りである。

無事境内に納まると、今度はまつりの無事を祝って、先づ裸坊による世話人の胴上げ、次いで一同輪になり豆腐で乾杯、大磯^{じめ}でご苦労さまとなる。

(付記)

- 裸になると、その1年間無病息災という。

- だんごを黒く焼いて食べると、その冬風邪をひかない。
- オンベの松の燃えさしを家の屋根へあげる。火除けのまじないとなって、火は出さない、もらわないという。

(まつりで唄われる歌)

松前木遣り

そうー らんえー… えー
めでた めでたあのえー…
そらよいとこせえー… よいやらー…
そーら道祖神だよ
よいとなー…

左義長音頭

どこでよー…染めたか 船頭衆の浴衣な
せえー…よいとせ
せな 背に帆をあげ 帆に波
いかりという字を紋に染め
どこの質屋へ流すとも
花水川に流すとも
いかりよー おろせば
やんで

流れはせぬぞ やあとこ
せえー よいとな
ありありや こりあ これわのせえー…
さあさやれさの せえー よいとな

大磯甚句

せえー…大漁祈願に 弁天さまへ
参りや恵比須の笑い顔
着たる絵紋の裾に波
ぬかりはないがえー…
はず思いの鰯ぶね

(終)

※本稿の内容は、北下町大北における記述を中心としている。